

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

20 世紀中国史の資料的復元

Reviving the History of Twentieth-Century China by Reviewing the Source Materials

2. 研究代表者氏名

石川禎浩

ISHIKAWA Yoshihiro

3. 研究期間

2019 年 04 月 - 2022 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

中国における近現代史の叙述は、領域によって程度の差はあるものの、イデオロギー型革命政党によって統制され、方向付けられてきた。かれらは党派ごとに自己中心的、あるいは独善的解釈による歴史像を持つだけでなく、そうした歴史像を支えるべく、歴史資料の収集やその編纂、刊行にも力を入れてきた。ただし、そのさいに資料はしばしばその歴史像に符合するよう編纂(改竄を含む)されてきたため、政治史にせよ、思想史にせよ、あるいは文学史にせよ、既存の公刊史料に基づく限り、研究者はどうしてもその枠組みから脱却できないという隘路に行き着いてしまう。それゆえ、近代の中国がどのようなものであったのかを知るためには、まず基本的な史料を編纂状態以前にもどすという気の遠くなる作業から始めなければならない。本研究班は、20 世紀の中国の政治、運動、文学、芸術といった領域で、それぞれ根本資料と見なされてきた基本文献に関して、その生成や編纂、刊行の経過を洗い直したうえで本来の姿にもどし、それによって中国 20 世紀史全般を復元し、再構築することを目指す。

The history of 20th century China, whether good or bad, has been written under the dictates of the political parties which have an ideological mindset of the revolutionary. They not only had their own self-centered narratives of the modern history, but also collected and compiled historical materials concerned to reinforce their narratives. The problem is, however, that they often made the falsifications when they edited those source materials into the official documents. Because of this, we should understand how their narratives were formed along with the

compilation of the historical materials in the century. In this research seminar, we shall investigate and restore various source documents which has been considered to be the basic materials in each area of modern China, such as politics, revolutionary movement, literature, art and so on. This type of research, which makes full use of original sources scattered around the world to revive the primary documents of twentieth-century China, would open the way for us to have a refreshing understanding of how the modern Chinese history really was.

5. 本年度の研究実施状況

隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進めた。班員は 30 数名、毎回の研究班例会の出席者は 20 名程度であった。年度末になり、新型コロナウイルスの感染拡大による研究活動の中断があったものの、それ以前に開催した例会は、15 回を数え、毎回事前にレジュメを班員に配布し、またコメンテーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。研究班では、まず報告者が 1 時間半程度の報告を行ったあと、コメンテーターが 30 分程度の批評を加え、その上で全体討論を実施するという形式を取った。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、初年度であるにもかかわらず、活発な議論が可能となった。また、2 名の招聘外国人学者をはじめ、(主として中華人民共和国からの)複数の外国人研究者・院生が継続的に参加していることも本研究班の特色であり、彼らとの討論を通じて、中国の近現代史関連の基本的な文献や資料集の成り立ちについての理解をいっそう深めることができた。資料的復元として、注目すべき研究・対象としては、吉野作造『支那革命小史』や、中国近代の代表的総合雑誌である『東方雑誌』などが俎上にあげられ、それらを資料として扱う場合の問題点や注目点が提示された。また、こうした活字資料以外としては、イギリス外交文書やキリスト教ミッション報告書、日中戦争期に宣撫工作を行った日本人の戦後インタビューなど、いわゆるオリジナル資料の発掘や分析も行われ、20 世紀中国を立体的に見る上での、多様な視座が提起された。

6. 研究成果の概要

なし

7. 本年度の研究実施内容

2019-05-10 20 世紀中国史の資料的復元 「20 世紀中国史の資料的復元」班を 開始する
にあたって 発表者 石川禎浩

2019-05-24 20 世紀中国史の資料的復元 戦後日本における 中国近現代史関連資料集
について 発表者 小野寺史郎 埼玉大学
コメンテーター 田中仁 大阪大学

- 2019-06-07 20世紀中国史の資料的復元 宣撫工作報告・回想録・戦後インタビュー —— 宣撫班熊谷康と中国農村 発表者 太田出 人間・環境学研究科
 コメンテーター 広中一成 愛知大学
- 2019-06-21 20世紀中国史の資料的復元 植田捷雄の上海租界認識について 発表者 郭まいか
 コメンテーター 江田憲治 人間・環境学研究科
- 2019-07-05 20世紀中国史の資料的復元 吉野作造『支那革命小史』及び 北一輝『支那革命外史』の検討 発表者 福家崇洋
 司会 奈良岡聰智 法学研究科
- 2019-10-04 20世紀中国史の資料的復元 胡適関連史料の編纂とその問題 発表者 森川裕貫 関西学院大学
 コメンテーター 宮内肇 立命館大学
- 2019-10-18 20世紀中国史の資料的復元 日中戦争の勃発と台湾における精神動員 発表者 鄒燦 大阪大学
 コメンテーター 太田出 人間・環境学研究科
- 2019-11-01 20世紀中国史の資料的復元 1930年代棉花に関する史料的検討——日・中・米三国間関係を中心に 発表者 秋田朝美 経済学研究科
 コメンテーター 都留俊太郎 同志社大学
- 2019-11-15 20世紀中国史の資料的復元 東亜同文会調査部と『支那年鑑』の編纂 発表者 王剛
 コメンテーター 高嶋航 文学研究科
- 2019-12-06 20世紀中国史の資料的復元 反右派闘争における「右派言論集」の史料的価値について——儲安平を中心に 発表者 林礼釗 大阪大学
 コメンテーター 谷川真一 神戸大学
- 2019-12-20 20世紀中国史の資料的復元 清末広西における壬寅奇災と英領香港 : 救済活動報告書の分析 発表者 土肥歩 同志社大学
 コメンテーター 蒲豊彦 京都橘大学
- 2020-01-17 20世紀中国史の資料的復元 中国共産党史資料の復元——『中央軍事通説』第1期をめぐって 発表者 江田憲治 人間・環境学研究科
 コメンテーター 小野寺史郎 埼玉大学
- 2020-01-31 20世紀中国史の資料的復元 1910年代『東方雑誌』の出典に関する検討: 杜亜泉研究との関係 発表者 李ハンキョル 文学研究科
 コメンテーター 森川裕貫 関西学院大学
- 2020-02-14 20世紀中国史の資料的復元 在華イギリス領事報告の整理と利用: FO228を中心に 発表者 村上衛

コメンテーター 鄒燦 大阪大学

2020-02-28 20世紀中国史の資料的復元 第二次世界大戦期の中国における「敵国人」
「戦俘」問題について——ニルス・A・ベンツ文書を基礎として 発表者 貴志俊彦 東南ア
ジア地域研究研究所

コメンテーター 大澤武司 福岡大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

なし

9. 研究班員

所内

岩井茂樹、村上衛、福家崇洋、漆麟、王剛、郭まいか

学内

江田憲治(人間・環境学研究科)、瞿艶丹(文学研究科)、谷雪妮(文学研究科)、高嶋航(文学
研究科)、太田出(人間・環境学研究科)、比護遙(教育学研究科)、貴志俊彦(東南アジア地
域研究研究所)、李ハンキョル(文学研究科)、秋田朝美(経済学研究科)

学外

韓燕麗(東京大学)、菊池一隆(愛知学院大学)、島田美和(慶應義塾大学)、鄒燦(大阪大
学)、瀬戸宏(摂南大名誉教授)、瀬辺啓子(佛教大学)、田中仁(大阪大学)、谷川真一(神
戸大学)、団陽子(神戸大学)、都留俊太郎(同志社大)、土肥歩(同志社大)、中村元哉(東
京大学)、丸田孝志(広島大学)、三田剛史(明治大学)、水羽信男(広島大学)、宮内肇(立
命館大学)、森川裕貫(関西学院大学)、山崎岳(奈良大学)、楊韜(佛教大学)、林礼釗(大
阪大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関 数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国 人	大学 院生	若手 研究 者	総計	外国 人	大学 院生	若手研 究者
所内	0	9 (2)	4 (2)	0 (0)	1 (1)	77 (20)	24 (14)	0 (0)	6 (6)
学内	3	12 (6)	6 (5)	5 (4)	1 (1)	86 (45)	60 (45)	58 (35)	11 (11)
国立大学	8	10 (3)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	47 (14)	27 (14)	0 (0)	0 (0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0

		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	11	11 (3)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	30 (5)	2 (1)	1 (1)	0 (0)
大学共同利用機関法人	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関	1	2 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	22 (11)	22 (11)	0 (0)	11 (0)
民間機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関	1	1 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	24	45 (15)	16 (11)	6 (5)	2 (2)	262 (95)	124 (85)	59 (36)	28 (17)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	22(20)
国際学術誌に掲載された論文数	6(4)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由	中国史研究では中国語・日本語で発表されるものの方が英語論文よりも学術的な重要性が高いことが多い。そのため、インパクトファクターの大小は学術的貢献の大小を反映しないことが多いため。以下、学術誌として高い評価を得られているものを挙げた。		
掲載雑誌	掲	主なもの	
	載	論文名	発表者名
	論		
	文		
	数		

歴史学研究	3	戦後日本の中国近現代史研究におけるナショナリズム論	小野寺史郎
東洋史研究	2	蒋介石「中國之命運」の國際的反響	森川裕貫
史学研究	2	華国鋒研究の概況と展望	田中仁
比較中国研究	1	近代中国結核療養院実態:以牯岭普仁医院为中心	瞿艳丹
孫文研究	2	「国民政府建国大綱」実現への模索	宮内肇
東方学報	2	「洋銀と紋銀——開港直後の廈門における海關銀号問題を中心に」	村上衛

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

13. 次年度の研究実施計画

本年度は年度末に新型コロナウイルスの感染拡大という想定外の事態により、3月に予定されていた研究班例会を延期せざるを得ないということになったため、一部の例会を4月以降にオンライン開催する予定である。また、本研究班に先行する研究グループの研究成果(毛沢東に関する人文的研究)が今年度末に刊行されたのにあわせて、次年度6月に本研究班のメンバーによる二回の共同合評会を行うべく、準備を進めている。また、オンライン開催に向けた準備作業を4月の末に行い、5月以降の開催が順調に進められるよう、会議開催環境を充実させる予定である。そのさい、これまでに培われた班員の研究グループへの参与意識がそがれないよう、開催の日時はこれまで同様の金曜午後とし、オンライン開催にありがちな散漫な研究活動にならぬよう、意識付けをおこないたいと考えている。次年度もこうした体制で、年に15-17回程度の研究班例会を開催する予定である。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等
なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度にはじまったばかりの研究班なので、成果の公表はまだ先になる見通し。